

社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社会科部会
第78号

第65回奈良県小学校 社会科研究大会

平成30年11月22日 秋津小学校

「自らの学びを深め、よりよ

い社会の形成に参画する力を育
てる社会科学習」を大会主題と
し秋津小学校で県大会が行われ
ました。秋津小学校では、いい
ところを探して伝え合い、互い
を認め合える学習集団の中で、
より良い暮らしや生活について
考え、主体的に社会に関わって
いく子どもたちの育成を目指し
取り組まれています。

「地域の人々・教材」との
「かわり合い・つながり合い」

公開授業では、二年生は地域
に住む人・働く人に焦点を当て
地域に愛着や親しみを深める授
業。三年生では、「学校の近く
にある」野瀬牧場ではどのよう
にして牛乳や肥料を作っている
のだろう」という単元を貫く学
習問題をつくる授業。六年生は
戦争中の御所市の様子を通して
日本の戦争を考える授業であっ
た。県教育委員会事務局学校教
育課・指導主事の谷聡先生の記
念講演の中では公開授業を授業
に生かすためのポイントでお話

しがあった。

社会科では学習問題の答えを
見つけるために調査・観察活動
を行うが、生活科は具体的な体
験や発想を通して気づくことが
大切である。その気づきの質の
高まりが深い学びになる。今回
はマインドマップを活用したこ
とで質が高まっていた。また「将
来大人になったらそうなりたい
ですか? (学習した地域の人の
ように)」という子どもの質問
は、社会参画の視点につながる
ものであった。教師はそのよう
な子どもをみとっていくことが
大切である。

主体的に学ぶためには学習に
意欲的にそして見通しを持って
取り組むことが大切である。問
いを見つけ、それに対し予想し
てどのようにすれば解決するか
考えた上で調査活動など学習計
画を考え進めていく。三年生で
は、単元を貫く学習問題をつく
る場面の大切さと学習を進める
中で教師が意図的に子どもたち
の見方・考え方を働かせるよう
な工夫を取り入れる大切さも提

案していただけだ。

六年生の学習では七十年以上
前の戦争の学習を自分の市を考
えることで身近なものとして捉
えることができていた。御所市
の視点から国内の視点・国際的
な視点へとステップアップでき
るように指導されていた。

新学習指導要領で言われてい
る社会との関わりを意識して課
題を追究したり解決したりする
学習活動を工夫し対話的で深い
学びを実現するような授業改善
につなげていっていただきたい。

学年別分科会での 研究協議の概要

第3学年部会

「わたしたちの市で
つくり出されるもの」

香芝市立関谷小学校
教諭 笹岡 枝里子

【本実践における提案】

本実践は香芝市の靴下工業
の様子をグラフや写真などか
ら知り、実際の靴下のタグを集
め見せることで、子どもたちか
ら「なんだらう」「どうしてだ
らう」という思いがたくさん出
てきた。そこで二種類の工場の
見学を行った。一つは「日本の
みで作っている靴下工場」、も
う一つは「日本と海外の両方で
作っている靴下工場」である。



発表の様子

靴下作りの工程を知るだけでな
く、日本製と外国製のそれぞれ
のメリット、デメリットについ
ても聞き取ることができた。「ね
り合い」のテーマを「これから
の靴下産業を考えよう」と設定
し実践した。香芝市の地場産業
であることを大切にしたいため
意見に偏りがあったが「しらべ
る」段階で得た知識をもとに話
し合いができた。評価は授業で
分かったことや感じたことを振
り返りとしてワークシートに記
入し、児童が学びを主体的にす
ることができた。

【研究協議】

・学んできたことをどのよう
に生かして話し合えば良いのか。
↓もっと具体的なことでテー
マ設定ができれば良かったと考え
ている。
・工夫の話をしているのに値段
が安いという話になってしま
う。「消費者のニーズに合わせ
ていく」ことに子どもたちの考え

深めるにはどうしたらよいか。
↓靴下の学習では値段に着目することは必要だったと考えている。今回は「これからの香芝を」と強調したので日本産の意見が多かったのではないかと。値段の高い安いはそれぞれのメリットデメリットを理解しているように思う。

・海外で作っていたら、地域の物ではないのか。

↓地域の産業からは離れていると考える。収入としては考えることができるが、技術は磨かれないなどの面があるのではないだろうか。

・何を子どもに考えさせたくて、何を子どもに理解させたいのかを教師側が明確にしておくことが大切ではないか。海外産が日本産かの話し合いになると5年生の学習になる。3年生では地域の工業に子どもの視点を戻すことが大切である。

【指導助言】

広陵町立真美ヶ丘第一小学校

教頭 福井 忍 先生

・3年で工場を取り上げる理由は、人の営みが見えやすく驚きや喜びが多くある。また工程が具体的であり、販売活動まで行っているところである。

・5年生の工業の学習との違いを明確にしたい。3年生では作っている人の思いや願いの学習であることを再確認したい。

・「見えるもの(具体物)」から「見えないもの(工夫、思い)」に気付き、その関わりの意味を考えさせたい。

・見学習では、①見学したいという気持ちにさせる。②事前に疑問点を出させ、整理し予想する。③見学の視点(何を見学させるか)を整理。などを大切にした。

・ねり合いは中心概念に迫るために総合的な視点で考えさせることが大切になる。自分の立場、友だちの立場ははっきり分かるテーマが良いのではないだろうか。

(晩成小学校 嶋野 倫代)

第4学年部会

「水害からくらしを守る」

—57水害から36年—
王寺町立王寺小学校

教諭 立部 秀樹

【本実践における提案】

本実践は、災害が自分事であると児童自身に感じられるよう、王寺町で過去に起こった57水害を取り上げた。昭和五十七年に起きた大和川流域に大きな被害をもたらした水害である。

「みつめる」では、水害の動画を視聴したり57水害の写真を見せたりした。平成二十五年にも同じ雨量の雨が降ったが、水があふれていないことから、学

習問題を「なぜ三十六年間も王寺町では水害が起きなかったのだろうか。」とした。

「しらべる」では、被災された方、消防署、消防団、自衛隊など実際に行ったり来ていたり色んな方法で取り組んだ。

「ふかめる」では、「これから王寺町で水害が起きたら命は守れるだろうか。」をねり合いのテーマにした。各機関が緊急時に備えて町を守る準備や計画を立てていることから「守れる」という立場や、計画通りにならないこともあるので「守れない」という立場に分かれた。児童相互が考えの確実な交流を行った。「ひろげる」では、水害から自分たちを守るためにできることを備えと対処という観点から考えてカードにまとめた。この学習を通して、自分たちが普段からできることをしよう、自分で自分を守る、という意識が身に付いた。

【研究協議】

・57水害の時には、被災して商売をたたんだ人もいる。災害が後々まで人々の暮らし・経済・交通に影響し、苦労を強いられる。映像を見て大変だというだけではなく、大変さがずっと続くという見方をしている。

・雨量は同じであっても平均気温や災害の多さは変わっている。自然が破壊されていること

も提起していくと高学年にも繋がっていくのではないかと。

・共助ではどこまで広げていってほしかったのか。
↓自主防災組織の話を聞いて共助を広げられた。

・知識の定着の仕方はどのようにされているのか。
↓メモをさせ、メモをもとに関連図を書き、発表して共有した。学級通信など視覚的に共有させた。ねり合いで見方考え方を言葉で共有できた。

【指導助言】

大和郡山市立昭和小学校

教頭 山口 弘一 先生

新学習指導要領での新しい切り口での挑戦で参考になる実践だった。

地域の関係機関が自然災害から人々の安全を守る学習については、市町村だけでなく、県レベルの取組が学習の対象となる。57水害の翌年に大和川流域総合治水対策協議会が設立され、総合的な治水対策として大和川流域を整備していった。広範囲で水害に対応しており、総合的に水害が減るようになり、これは、グラフでも確かめることができる。大和川水系の広範囲での学校で実践可能である。

新学習指導要領における問題解決的学習の意義は大きい。日本は課題先進国である。その課題に対しては既存の答えがなく、



発表の様子

5年分科会

「国土の環境を守る」

—自然災害から人々を守る—
五條市立五條小学校

教諭 吉村 真一

【本実践における提案】

本実践では地域で起こった紀伊水害を取り上げた。自然災害や防災・減災を身近に考えられるようにするため、現地へ見学に行ったり、消防署・気象

庁・国土交通省の方々をゲストティーチャーとして、話を聞いたりした。それにより子どもたちは自然災害が他人事ではないと感じたり、災害時の救助活動などの取り組みについて知りやすくなった。

ねり合いでは問いを「みんなで減災とはどういうことだろうか」と設定した。子どもたちはこれまでの学習から地域で取り組めることや自分たちにできることを考え意見を伝え合った。ここでは、学習をもとに理由をつけて書くこと・話すことを中心に活動し、多くの児童が自助・共助・公助について理解することができた。

「ひろげる」段階では、地域の人と協力しながら防災・減災に取り組んでいくことや自分たちに何ができるか園児に発信することができた。

【研究協議】
・避難訓練や実際の地震のとき子どもたちの様子に変化はあったか。

↓授業の内容に関する発言があったり、実際の時も訓練の時と同様に行動したりできた。
・気象庁など、ゲストティーチャーとどのように繋がったのか。
↓ホームページを利用したり、電話や直接訪ねたりする。また、ゲストティーチャーのいる校区の学校へ連絡するのもよい。



学習の様子

・災害が起きた現地へ行くことによって五感で感じることできたり、ゲストティーチャーに会ったりして子どもたちは本教材を身近に感じることができた。

【指導助言】

奈良市立鼓阪北小学校

校長 大西 康仁先生

・子どもたちの興味・関心の持続や対話的で深い学びにするために、子どもの具体的な姿に変換できるようにあてを決定する。また、前時にきつちりまてて本時に臨めるようにする。(見通しを持たせる。)

・学習問題を「(手段)を通して(到達点)する」とし、手段・到達点を明確にする。(を話し合おう、を調べよう、としない。
・文字だけの文章やグラフからの読み取りを苦手とする子どもが多い。

↓語彙力の低下による場合もある。辞典などで簡単な言葉に交換する。円グラフはカラフルに

しすぎない。日本だけ濃く塗る、などする。

・キーワードを用意し、それを使って自分でまとめさせても良い。語彙力の向上にもつながる。
・全員が意見を持つ・先生がなるべく話さない工夫をする。

↓同じ意見か違う意見か聞いたり、子どもにもう少し詳しく説明するように促したりする。

(斑鳩東小学校 大田 沙織)

6年分科会

「戦国の世から天下統一へ」

—地域教材

「松永久秀」を通して—

平群町立平群北小学校

教諭 中澤 哲也

【本実践における提案】

本実践では、研究仮説を次のように設定した。「地域にいた戦国武将の久秀を取り上げることで、興味・関心をもち主体的に学び、地域に対する誇りや愛情を育むことができる。また、戦国時代を生き抜いた人々の営みや思いについて、見方・考え方を働かせながらねり合うことで、自分との関わりを意識しながら、戦国の世を捉えることができ、よりよい社会の形成に参画しようとする児童が育つ。」

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、児童が社会的現象の見方・考え方を働かせ、課題

を追究したり解決したりする活動を取り入れるための授業設計を行った。

【研究協議】

○単元の導入として、地域の先人である久秀を取扱った。単元の出口では、信長や秀吉らの業績、戦国の世の時代背景を児童が捉えられるような単元構成の工夫を行った。

○久秀と信長の業績や生き方を、表に整理する際、七つのカテゴリー(戦い・政策・お城・貿易・宗教・お金・その他)は教師から提示した。それにより、児童が二人の共通点や相違点に気付くことができた。人物の業績や生き方を表にまとめる手立ては、学習を進める上で有効であった。

○本時では児童に多面的な見方・考え方を働かせ、議論を深めさせる予定であった。しかし、机間指導の際に、児童のノート記述が軍事力の視点に偏っており、一面的な議論になると感じた。そこで、「なぜ、他の大名は鉄砲を使用しなかったのか。」とゆさぶりの発問をした。それにより、児童は経済力の視点も取り入れながら信長の強さを捉え直すことができた。

【指導助言】

奈良県教育委員会事務局

学校教育課指導主事 谷 聡先生

①教材

本実践では、久秀を扱って

るが、久秀を通して信長を学習している。さらに、学習指導要領の(ア)カ、イ(ア)を身に付けることをねらいとしていなければならない。教材として入り口は広く、ゴールは高くしておくが良い。

②ねり合い

社会的な見方・考え方を働かせて中心概念に迫るのは良い。ただ、中心概念が書けたから、分かっているとはいえない。その際には、「例えば、どういうことなのか。」と問うことで確認することが出来る。逆に、具体的事象から概念を獲得させた場合には、「つまり、どういうことなのか。」と問うことで導くことができる。また、「なぜ、起きたのか。」と事象に注目させることも必要だが、「なぜ、起きなかったのか。」と背景を考



学習の様子

えさせることも有効である。

③ 評価

めあて、ねらい、目標、まとめ、ふり返りを大切にしてほしい。まとめは問いに対する答えである。ふり返りは、初めの予想に対して、正否や新たに獲得した知識を検証することである。そして、見方・考え方が高まり、習得知識の質や思考が高まる。だから、この実践でされた予想を検証するための調べ学習は、参考になる。

(郡山西小学校 島 俊彦)

全国・近畿大会に参加して

第56回全国小学校社会科研究協議会・埼玉大会に参加して

桜井市立城島小学校
教諭 鶴岡 雅之

十月二十五日・二十六日、全国小社研・埼玉大会が開催された。大会主題は「社会がわかり社会にかかわる子供を育てる社会科学習」である。三会場で授業公開、実践発表が行われ、第一会場の埼玉県川口市立本町小学校の研究発表に参加した。埼玉県小社研が掲げる研究の視点が以下の通りである。

- ① 授業改善につながる問題解決的な学習過程の充実
- (1) 「つかむ」 (2) 「調べる」
- (3) 「まとめる」 (4) 「いかす」

② 社会的事象の見方考え方を働かせて社会的事象の意味や特色を捉える「問い」

③ 社会的事象の特色や意味を多角的に考えるための「学び合い」

よい社会の形成に参画にする力を、本単元でどのように付けていったのかという視点でも取組を見てもらうことができた。指導助言の平群町立平群小学校の稲浦聡校長先生からは、当時を生きた人々の思いに児童が迫ることができたか検証が必要であることを指導いただいた。そこで、ねり合いを成立させる要因としてディベートの形態を活用し、幕府や薩長など立場をあえて決めないことで、多様な考えを引き出すことができた点を評価していただいた。そこから、ねり合いによってふかめたり、歴史を学習したりする意味についても話していただくことができた。

これらを踏まえた授業実践や研究発表が行われていた。本町小学校では、「社会がわかり社会にかかわる子供を育てる社会科学習―社会的事象の見方・考え方を働かせた思考力の育成―」というところで、県や各校の研究の重点が「思考・判断・表現」にあることが分かった。校内には児童の学習の様子や思考ツールの活用などの分かる掲示があり、学習意欲を高める工夫がなされていた。また、前回の東京オリンピックに関わる資料が展示されており、2020年の東京オリンピックへの関心を高める展示もされていた。

学年別研究協議会では、県小社研六年部会の提案として、「明治の新しい国づくり―黒船来航と新しい世の中に向かって―」の実践を報告した。参加者からは、ねり合いの在り方や学習活動を通して子どもたちの様子についての質問が出された。また、本会の研究主題にもある、より

第65回近畿小学校社会科教育協議会・和歌山大会に参加して

田原本町立田原本小学校
教諭 中本 篤志

十一月二日、近畿小学校社会科教育研究大会が和歌山市雑賀小学校で開催された。大会主題は、「よりよい生き方をさぐりつづける社会科学習―一人ひとりが追求し、追求し合う学習を大切に―」である。

和歌山県小社研では、子供たちが、環境や社会の大きな変化に翻弄されるのではなく、変化を前向きに受け止め、これから先

に直面するであろう新しい課題に対して、試行錯誤しながらも柔軟に対応し解決し続ける力が子供たちの成長した未来において必要になってくると考えている。

そのためには、他者との関わりを大切にしながら、子供たちが自ら学びたい、学び続けたいと思える学習に取り組んでいく必要がある。学習の対象とのお出合いを大切に、問いを引き出し、生かすことが重要であり、子供の問いかけを中心に据えた主体的な授業作りを大切にされている。その実現のために、一人一人が追求する時間と場を保障すること、集団で追求し合う場を設定することの、「一人学習」と「全体学習」との組み合わせを効果的に活用し、子供の追求力を育て、その先に子供自身が学び続ける姿を育みたいと考え授業実践や研究発表が行われている。会場である雑賀小学校でも、「よりよい自分と

社会を創造する子供の育成」を研究主題とし、教材との出合いや子供が疑問に思ったことつぶやきを大切にしながら、主体的に自分の意見を交流させたり議論し合っていたりする授業の様子が数多く見られた。また、教室には、今まで子供たちが調べた学習が模造紙にまとめられていたり、図工の作品の中にも

社会科を取り入れた掲示物が展示されたりしていた。

学年別協議会において、奈良県小社研6年部会の提案として、「江戸の社会と文化・学問―現代でも受け入れられる「市松模様」―」の実践を報告した。参加者からは、学習問題やねり合いのテーマの設定の仕方について、「ひろげる」段階の学習の位置づけ、関連図の作成の仕方などについての質問が出された。

指導助言の田原本南小学校沢田政宏校長からは、子供たちの思考力を鍛えるためには、調べ学習で獲得してきた事実をしっかり確認し合い、自分の見方・考え方をもてるような学習を進めていくことが大切だと助言をいただいた。

記念講演では、早稲田大学教授藤井千春先生が、「知識基盤社会」の時代における社会科学習―「主体的・対話的で深い学び」とは何か―と題し、「主体的・対話的で深い学び」を生み出すためには、子供の興味・関心や、人との出合い、実際に体験したことなどを通して、その中で生まれる子供のつぶやきや、子供たち自身の言葉で語るることの大切さについて講演された。